

2025年度

奈良大学大学院 春季入学試験

社会学研究科 社会学専攻 社会文化研究コース

試験問題

専門科目

《注意》

解答は、設問ごとに解答用紙を替えて記入してください。

第1問 社会を対象とした実証研究を実施するにあたって満たすべき要件を論述せよ。

第2問 以下のAおよびBのいずれかのテーマを1つ選択し、論述せよ。

- A. 偏見や差別の解消または低減策について、社会心理学の知見を踏まえて論述せよ。
- B. 社会を研究対象とする様々な学問領域を念頭に、社会学の独自性をその学史を踏まえて論述せよ。

第1問

【出題意図】

この問題は、社会科学における実証研究の基本的な考え方を理解しているかを問うものである。単に研究手法の名称を知っているかどうかではなく、「なぜその要件が必要なのか」を自分の言葉で説明できるかどうかを見ている。具体的には、概念をどう測定するか、研究の進め方をどう設計するか、そして研究対象が人間であることへの倫理的配慮ができていないか、という三つの側面から理解度を確認する。また「社会を対象とした」という条件に注目してほしい。自然科学の方法をそのまま社会に当てはめることの難しさ、つまり調査者が対象に影響を与えること、研究者自身の価値観の問題、文化や歴史による文脈の違い、といった事柄に気づいているかどうかは評価のポイントとなる。大学院での研究を始めるにあたって、方法論について自覚的に考えられる姿勢が身についているかを確認したい。

【解答例】

社会を対象とした実証研究が満たすべき要件は、大きく「科学的妥当性」「倫理的妥当性」「社会的妥当性」の三つの次元に整理できる。

第一に、科学的妥当性の確保である。これは概念の操作化・測定信頼性・妥当性、および研究手続きの透明性と検証可能性を含む。研究者はまず、「社会的孤立」「格差意識」のような抽象的概念を観察・測定可能な指標へと操作化しなければならない。その際、測定が概念を的確に捉えているかという内的妥当性と、得られた知見が他の文脈・集団へ一般化できるかという外的妥当性の双方を検討する必要がある。加えて、研究手続き・分析過程を公開し他者による検証を可能にすること、すなわち検証可能性の確保、が現代の社会科学における科学的妥当性の重要な要件となっている。これはデータや分析コードの公開を含むオープンサイエンスの要請とも連なるものである。

第二に、倫理的妥当性の確保である。社会研究の対象は人間であることから、インフォームド・コンセント（説明に基づく同意）、匿名性・秘密保持、研究参加による不利益の回避が求められる。また研究者自身が特定の価値観や権力関係を持つ社会的存在であるという自覚、すなわちポジショナリティへの省察も必要となる。これはウェーバーが提起した価値自由の問題とも連なり、研究設計・データ解釈の段階における主観的バイアスの制御が問われる。

第三に、社会的妥当性の確保である。自然科学と異なり、社会研究においては観察行為自体が対象に影響を及ぼす可能性がある（観察者効果）。またデータが生成された歴史的・文化的文脈を無視した一般化は、知見の歪曲につながる。したがって研究者は、自らの研究が立脚する認識論的立場、たとえば実証主義、解釈主義、批判的实在論などを明示し、知見の射程を慎重に規定する義務を負う。

以上の三要件は独立したものではなく、相互に緊張関係を持ちながら研究の質を規定する。たとえば厳密な測定への拘泥が研究対象の生活世界を切り捨てる危険があるように、科学的妥当性の追求が倫理的・社会的妥当性と衝突することもある。優れた実証研究とは、この緊張を自覚しつつも三次元の均衡を追い求める営みに他ならない。

第2問A

【出題意図】

ステレオタイプ研究を中心とした社会的認知研究では、偏見や差別の解消が難しいこと、そしてステレオタイプを支える認知的メカニズムについて繰り返し示されてきた。このような社会的認知研究について、いくつかの論点から内容をまとめることを求める設題である。解答例に挙げた以外にも多くの理論や研究例があるため、内容は異なっても構わない。

【解答例】

偏見や差別は、単なる知識不足ではなく、人間の認知や社会関係の基本的な仕組みに根ざしているため、解消は容易ではない。これまでの研究では、その理由をいくつか示している。

第一に、人間の認知はカテゴリー化に依存している。人は複雑な社会を理解するために他者を集団に分類し、その集団に関する一般化された信念、すなわちステレオタイプを形成する。このようなカテゴリー化は認知的効率を高める一方で、個人差を無視した過度な一般化を生み、偏見の基盤となる。さらに、人は既存の信念を支持する情報を重視し、反証的な情報を軽視する傾向（確証バイアス）をもつため、一度形成された偏見は修正されにくい。

第二に、偏見は集団間関係と密接に結びついている。社会的アイデンティティ理論によれば、人は自分が所属する内集団を肯定的に評価することで自尊心を維持しようとする。その結果、外集団を相対的に低く評価する傾向が生じやすい。つまり、偏見は個人の態度というより、集団間比較の中で維持される社会的現象でもある。

第三に、偏見は自覚されにくい場合がある。近年の研究では、本人が意識していなくても自動的に作動する潜在的態度が存在することが示されている。このような潜在的態度は、自覚的には平等主義的な価値観を支持していても、判断や行動に影響を与える可能性がある。

以上のように、偏見や差別は認知的過程、集団間関係、そして自動的な心理過程に支えられているため、単に「偏見を持つべきではない」と啓発するだけでは十分ではない。偏見の解消には、集団間接触の促進や制度的な差別の是正など、心理的・社会的両面からの長期的な取り組みが必要である。

第2問B

【出題意図】

この問題は、社会学という学問が何を目指しているのかを、他の学問との比較と学説の歴史を通じて説明できるかを問うものである。「社会を研究するから社会学」という単純な答えでは不十分であることにまず気づいてほしい。経済学も心理学も法学も、広い意味では社会を対象としているからだ。では社会学はどこが違うのか——その問いに対して、心理学や社会心理学との分析レベルの違いを意識しながら、コントに始まりデュルケーム・ウェーバー、そして現代の理論家たちへと続く学説の流れの中で答えを組み立ててほしい。暗記した知識の羅列ではなく、「社会学とはこういう視点で社会を見る学問だ」と自分なりに語るかどうかを見ている。社会学を学ぶ者としての知的な自覚が感じられる答案を期待する。

【解答例】

社会学の独自性は、その対象ではなく視点にある。経済学も法学も心理学も、広い意味では「社会」を対象とする。したがって「社会を研究する学問が社会学である」という定義は、社会学の固有性を確保しない。では何が社会学を他の学問から区別するのか。それは、あらゆる社会現象を個人と集合的拘束の相互規定関係として分析する視角である。

この点を他の隣接領域との比較で明確にしておきたい。心理学は個人の内的プロセスを分析単位とする。社会心理学はそれを一歩進め、個人と個人の間を分析単位とする。これに対して社会学は、個人を超えた集合的拘束、つまり制度、規範、階層構造、文化などと個人との相互規定関係そのものを分析単位とする。対象の違いではなく、関係の射程と階層の違いによって学問が分化しているのである。

この視角は社会学の学史に一貫して流れている。19世紀の産業化・都市化という社会変動の中で誕生した社会学は、コントの秩序問題の提起に始まる。個人を主体としながら、いかにして社会秩序が成立するのか。この問いは最初から個人と社会の関係を主題としていた。デュルケームは自殺率や犯罪率といった集合的現象が個人の心理に還元できない独自のパターンを持つことを示し、集合的拘束の分析レベルの必要性を論証した。ウェーバーは合理化・官僚制・宗教倫理と資本主義の親和性を分析し、個人の意味付与行為と集合的構造の連関を解釈的方法によって追究した。

20世紀以降も、この基本視角は形を変えながら継承される。パーソンズは個人の行為と社会システムの統合問題を体系化し、ギデンズは構造が行為を拘束しつつ行為によって再生産・変容されるという構造化理論を提示した。ミルズが「社会学的想像力」と呼んだものも、個人的な問題を集合的・歴史的な脈に接続する知的操作であり、同じ視角の表現である。

このように社会学は、個人に解消されない集合的拘束の存在を認めつつも、それを個人との相互規定関係の中で動的に分析する。社会を固定した実体として把握するのではなく、個人と社会が互いを規定し合う過程そのものを問い続ける、それが社会学という視点の学問の、学史を貫く独自性である。

2025年度

奈良大学大学院 春季入学試験

社会学研究科 社会学専攻 社会文化研究コース

試験問題

外国語（日本語）

【解答に関する注意】

- ① 解答は、全て解答用紙に記入すること。
- ② 日中辞典および中日辞典の持ち込みを認めます。ただし、電子辞書は不可。

【1】以下の文章を読み問に答えなさい。

私立の名門校でも特別な教育方針を誇る実験校でもない。日本のごく普通の公立小学校の日常を撮ったドキュメンタリー映画が教育大国フィンランドでロングラン上映され話題になっている。「小学校～それは小さな社会～」監督は日英をルーツに持つ山崎エマさんだ。▼1年生と6年生の学校生活をコロナ禍の1年間、丹念に追った。授業や給食、教室の掃除や運動会の練習など、日本人にはどれも懐かしい見慣れた風景のはず。(A) 海外から眺めれば決して「普通」ではないことに気づかされる。例えば靴をそろえる習慣。げた箱の中の乱雑な上履きを子供たちが整える場面が登場する。▼一人が手を動かすと、その輪が周りに広がっていく。誰の命令でもない。集団に(1) おのずと 目的意識が生まれ、(B) が形成される。勤勉さ、責任感や協調性といった「多くの日本人に刷り込まれている特質を理解するヒントは小学校にある」と監督は語る。世界に稀な美質である半面、同調圧力に転じうる(C) を描き出す。▼学級会や日直といった児童の自治を促す特別活動は「TOKKATSU」と呼ばれ、エジプトやインドネシア、マレーシアなど世界に広がっているとも聞く。児童の成長を見届ける映画の終盤、卒業式に涙する先生たちの映像にすすり泣く声が館内に広がった。この日還暦を迎えた当方も、(2) 涙腺の緩みを抑えられなかった。

出典：日本経済新聞 2025年1月21日「春秋」

問1 空欄A～Cに入る最も適切な語句をそれぞれ選んで、番号で答えなさい。

A：①だから ②したがって ③よって ④けれど ⑤ゆえに

B：①秩序 ②対立 ③学校 ④集団 ⑤役割

C：①美德 ②危うさ ③長所 ④性急さ ⑤利点

問2 文中の下線部(1)「おのずと」の意味に最も近いものを選び、番号で答えなさい。

①無理やり ②次第に ③やがて ④ようやく ⑤自然に

問3 文中の下線部(2)「涙腺の緩みを抑えられなかった」の意味に最も近いものを選び、番号で答えなさい。

①泣くのを我慢した

②泣くのを我慢できなかった

③泣く気にもならなかった

④少しだけ涙が出た

⑤もらい泣きをした

問4 この文章全体の要約を、50字以内でしなさい。

【2】以下の文章を読み問に答えなさい。

特に農業経済と関係の浅からぬものを説いてみるならば、それは早乙女 (a) 出稼という新現象である。(1) 農場が分立して機械をもって外部労働の補給に代えようとすると、一年の内で手の足らぬのは田植の時だけになるから、纏めてこれを他部落から招こうとするようになるのも自然である。そこで(b) 早稲どころや田の少ない地方から、群をなして女が雇われに来るのである。伊勢の一志郡などでいう島の女、信州川中島附近の越後の (c) 田植女、秋田県由利郡などの荘内の早乙女などは、今では年々の檀家のごときものができて、いつも定まった家の田に来て植えているが、新たにそういう契約を開始した土地も、だんだんに有るようである。従うて賃銀の支払方法も今風で、きっと (d) 元締のような者がもうできていることと思うが、前からある者は田植の投資期にはただ食わせてもらうだけで帰って行き、秋の収穫季に今一度遣って来て、約束の給米を受けるほかに、また (e) 落穂を拾わせてもらったという話である。すなわちおそらくは村内の寡婦が、稲作作業の全体に参加していた頃からの遺風かと思う。漁業の方でも (f) 地曳網などの獲物に対しては、カンダラと称して至って鷹揚なる分配法が認められている。(2) 豊収の際には農民の心持もまた別であった。ミレエの名画を見ると思い起こすごとく、西洋でも落穂拾いは寡婦の役徳と認められていた。是が後家になっても容易には農作と絶縁しなかった古い理由であろうと思う。

出典：柳田國男「(g) 木綿以前の事」

問1 文中の下線部 (a)～(g) の読みを、ひらがなで書きなさい。

問2 文中の下線部 (1) から推察できないものを2つ選び、番号で答えなさい。

- ①この文章が書かれた時代の稲作では、田植に多くの人手を必要とした
- ②この文章が書かれた時代の稲作では、ほとんどの作業を機械で行なっていた
- ③この文章が書かれた時代、田植は機械で行なわれていなかった
- ④この文章が書かれた時代、田植で足りない人手は主として外部労働から補給していた
- ⑤この文章が書かれた時代、田植で足りない人手はだいたい集落内で調達できた

問3 文中の下線部 (2) の意味に最も近いものを選び、番号で答えなさい。

- ①豊作で収入が見込める時には、農民の他者への情け心も深くなった
- ②豊作の時の農民は大変忙しいので、外部労働を必要とした
- ③豊作の時の農民は、例年以上に貯蓄を増やそうとした
- ④農民は豊作の時には、漁民よりも生活に余裕ができた

問4 この文章全体の要約を、30字以内でしなさい。

2025年度 大学院入学試験 社会学研究科社会学専攻社会文化研究コース
外国語（日本語）（出題意図、解答例）

【1】

【出題意図】

日本の新聞の朝刊1面では、その時々の中での話題を、記者経験のある執筆者が独自の切り口で語る短い随筆（エッセー）が、毎日掲載される伝統があります。朝日新聞の「天声人語（てんせいじんご）」が最も有名ですが、ここでは日本経済新聞の「春秋（しゅんじゅう）」を取り上げました。内容は、昔からいかにも日本人の特質のように言われてきた勤勉さや集団内の協調性、さらには同調圧力などが、公立小学校の日常生活の中から自然発生する様子を捉えたドキュメンタリー映画が、教育大国として知られるフィンランドで驚きをもって観られている、というものです。短い文章ですので、まずは全体の意味をつかみましょう。

問1は空欄補充の問題です。Aは適当な接続詞を問うています。①②③⑤が全て順接の接続詞であるのに対して、④のみが逆接の接続詞になっています。

問2の「おのずと」は漢字に直すと「自ずと」ですので、⑤の「自然に」が意味として近いと推察できます。

問3の「涙腺が緩む」は泣くこと、または泣きやすい（涙もろい）ことを表す慣用表現です。それが「抑えられなかった」のですから、我慢できずに泣いてしまったこととなります。

【解答例】

問1 A：④ B：① C：②

問2 ⑤

問3 ②

問4 日本の公立小学校のドキュメンタリー映画では、集団に自然に目的意識や協調性が生まれる様子が描かれている。（50字）

【2】

【出題意図】

日本で民俗学を確立した柳田國男（1875-1962）の1938年の著作「木綿以前の事」からの出題です。戦前に書かれたものでもあり、今の日本語よりもやや堅苦しく古めかしく感じられる文章で、読みづらかったかもしれません。もし日本の近代以降の研究をしたいのであれば、このような文章にも慣れていかなければなりません。柳田民俗学は、彼が「常民」と名づけた一般庶民の暮らしやものの考え方を重視した学問でしたが、今回の出題した文章はまさにそのような内容となっています。

問1は、漢字の読み方を問うものですが、日本独特の読み方（訓読みなど）に慣れていない人には難しかったかもしれません。(f)の中の「地曳（じびき）」は1文字目を音読みして2文字目を訓読みするもので、「重箱（じゅうばこ）読み」と言われます。これとは逆に、1文字目を訓読みして2文字目を音読みするものは「湯桶（ゆとう）読み」と呼ばれます。

問2は、文章全体の読みに関わります。1930年代のこの時代にも日本農業の機械化は進みつつあったものの、田植はまだ人手を中心に行なわれており（現在の日本ではほぼ機械化され、田植機で行なわれています）、そのためにかえって田植の時期の人手不足が深刻になり、よその場所から臨時の労働力を大量募集するようになったということです。

【解答例】

問1 (a)でかせぎ (b)わせ (c)たうえ (d)もとじめ (e)おちぼ (f)じびきあみ (g)もめん

問2 ②⑤

問3 ①

問4 田植で足りない人手を他部落から補給する早乙女出稼が生じている。(30字)

問3は、下線部(2)の直前の「鷹揚（おうよう）」という言葉がヒントになっています。働き手の夫を失って生活が苦しい「寡婦」などに対しては、特に強く必要とされない落穂拾いなどの作業をしてもらって生活の足しにさせてあげたという、昔の農民（あるいは漁民）が懐の温かい時には困った人たちへの思いやりも深かった実態を述べています。